

# Museum News

## 秋田県立博物館ニュース



収蔵資料紹介（考古部門）

### 大木式縄文土器

羽後町仙道で出土した大木5式に相当する深鉢形土器です。  
大木式土器は、東北地方を中心に分布する縄文土器の型式のひとつです。  
県内の縄文時代前期を代表する資料であり、開館以来寄託資料として  
展示していましたが、このたび寄贈していただきました。

## 目次

表紙・目次	P.1
企画展紹介	
（報告）重要文化財「菅江真澄遊覧記」の公開	P.2
（報告）蓑虫山人－秋田を歩いた漂泊画人－	P.3
企画コーナー展示	
（報告）「真澄酒物語－真澄と酒を巡る話－」	P.4
学芸ノート	
（生物部門）アリ採集	P.5
（歴史部門）「工事許可申請」のために作成された城下絵図	P.6
出張展示	
「明治の広告デザイン くせになる引札の魅力」	P.7
博物館の風景	P.8



## 企画展 菅江真澄資料センター開設 25 年記念 重要文化財「菅江真澄遊覧記」の公開

重要文化財「菅江真澄遊覧記」89冊(77冊12帖)は、文政5年(1822)12月、菅江真澄が秋田藩校明德館に納めた著作を中心に構成されています。この資料は、江戸時代後期における郷土の歴史や文化、自然を知る手がかりとして、特に秋田では、長年、郷土史研究の中心に位置づけられてきました。まさに珠玉の文化遺産と言えます。今年度、菅江真澄資料センターの開設 25 年にあたり、当館寄託資料である重要文化財「菅江真澄遊覧記」の彩色図絵を紹介しました。

### 展示構成

- 序章 菅江真澄とは
- 第1章 真澄の記録と重要文化財
- 第2章 旅の見聞を記録する(日記39冊)
- 第3章 名どころを描く(勝地臨毫12冊)
- 第4章 地域を調査する(地誌38冊)
- 第5章 25年目の菅江真澄資料センター

### 展示の特徴(当初計画)

- 主たる展示資料は重要文化財全冊
- 図絵 356 図を 4 期に分けて詳細に解説
- 「菅江真澄遊覧記」を 18 の視点から解説
- 図絵と現在の風景を対比したビデオを上映
- 「菅江真澄遊覧記」全頁をパソコンで公開
- 展示内容を紹介する解説資料を配布

### 展示を終えて

○新型コロナウイルス感染防止のために5月10日(日)まで当館が臨時休館したことから、5月12日(火)、第2期からの開展となりました。また、重要文化財を多角的に鑑賞していただくために、常設展にある閲覧用パソコンを会場に置く予定でしたが、ウイルス感染防止の観点から設置を中止にしました。講演会・博物館教室・ビデオ上映会・展示解説会の関連事業もすべて中止にしました。

○展示では、真澄の特徴である図絵を鑑賞していただくため、開帖した1図ごとの解説を資料の前に置きました。解説が図絵の読み解きに必要だと考えたからです。また、解説で指摘している箇所がわかりにくい場合は、図絵の部分的な拡大や地名を明示した補助パネル(各期 20 箇所ほど)を設置しました。

○カラー印刷の解説資料(12頁)を無料配布したほか、開展後、来館者の要望を受けて、「菅江真澄遊覧記を知る 18 の視点」についての資料(館内印刷)を配布しました。また、解説文の文字データ・開帖予定・カラー版解説資料を PDF 形式でホームページに6月末日まで掲示しました。

○来館できない方のために、展示内容を紹介する動画(4分間)を作成し、6月末日までホームページで配信しました。

○入場者数は少なかったのですが、時間をかけて長時間鑑賞する方が多い展示会となりました。

(菅江真澄資料センター 松山 修)

## 企画展 「蓑虫山人—秋田を歩いた漂泊画人—」

蓑虫山人、本名土岐源吾は天保7年(1836)美濃国安八郡結村に生まれ、14歳の若さで郷里を離れ、絵筆を頼りに諸国を放浪しました。明治10年(1877)頃から同29年まで北東北を中心に旅を続け、明治20年代には秋田を精力的に巡り、各地に作品を残しました。作品の中でも特に「絵日記」と呼ばれるタイプの画帖には、蓑虫山人自身が登場し、歓待の場面や各地の風景のほか、興味をもった民俗的事象や考古資料などが描かれており、歴史・民俗・考古など様々な分野における貴重な資料となっています。当館では昭和60年の美術展「蓑虫山人—漫遊の画家—」以来の企画展であり、没後120年という節目の年での開催となりました。

本展では、当館蔵の作品と考古資料を中心に、約100点を展示しました。蓑虫山人の経歴や特技、秋田を巡る旅といった基礎的な情報については解説パネルを作成しました。展示の主体は当館所蔵の画帖『蓑虫山人画記行』で、2冊のうち秋田分の全点を掲載順に紹介しました。この画帖には同じく当館所蔵の重要文化財「人面付環状注口土器」および佐藤初太郎旧蔵考古資料が掲載されており、比較しやすいように図画と実物とを近くに並べました。蓑虫山人は絵描きでありながら、考古資料の描画にあたっては形や大きさに注意を払って記録していたことを理解していただけたのではないかと思います。なお、当初は県内各地の個人や寺社、公共施設等が所蔵する作品やゆかりの品を借用し、一堂に会して展示する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、今回は断念しました。資料の貸出に承諾いただいていた皆様には心よりお詫言いますとともに、また別の機会に改めて御協力願いたく存じます。

展示構成：第一章 蓑虫山人とは、第二章 蓑虫山人画記行の世界、第三章 残された作品

(考古部門 加藤 竜)



人面付環状注口土器とその図画。会場では「人面付環状注口土器は潟上市の宝。絵と実物を一緒に見ることができて良かった」という言葉もいただきました。



佐藤初太郎旧蔵考古資料と図画。描かれてから100年以上経過したのち、博物館で実物と図画が再会したことを知り、驚く声も聞かれました。



風景画をじっくり観覧する方がよくみられました。蓑虫山人が逗留し、描いた家の子孫の方も来ていただき、懐かしい景色と仰っていました。

## 菅江真澄資料センター 企画コーナー展示 「真澄酒物語 - 真澄と酒を巡る話 -」

真澄は各地を旅して歩き、人々の生活をつぶさに記録しました。その中には、酒にまつわるものが多く含まれています。酒は人類の歴史上、古くからその存在が確認されています。人は酒を飲むほどに心がやわらぎ、他者との会話が滑らかで楽しいものになることに気付くとともに、自然を司る神々へ感謝を伝え、日々の平穏を祈るための捧げ物としての価値を酒に見出してきました。当然、人と酒の関係は深く、生活の中のあらゆる場面において、酒はいつも人のすぐそばにありました。人々の生活を詳しく記した真澄の記録に、酒が多く登場するのも頷けます。

展示では、真澄が記録した酒にまつわる様々なエピソードを整理し、「酒を供える」、「酒を楽しむ」、「酒の名は」、「酒に飲まれる」、「酒を商う」の5つの項目を立ててトピック的に紹介しました。

「酒を供える」では、現在の北秋田市、男鹿市、大仙市周辺で行われていた、刈り取った稲穂と酒と一緒に神様に供える「かいほかい穎祭ほ」や「さけ穂酒」と呼ばれた神事について取り上げました。秋田の地で行われているこれらの神事は、平安時代の法令集『えんぎしき延喜式』第八巻にある「ねんさいのりと祈年祭祝詞」そのままの古さまの神事であると、真澄は記録しています。

「酒の名は」では、真澄が命名した酒について取り上げました。文化11年(1814)地誌作成調査のため、真澄は湯沢市皆瀬川向に赴き、肝煎、佐藤太治兵衛家の世話になりました。その縁から、佐藤家で醸造した酒の名を付けるように頼まれた真澄は、土地の清麗さや酒を飲んだ人々の長寿を祈念して「御代ノ松」と「千世ノ春」という二つの名を酒に付けることを書に認めて、佐藤家当主に送りました。「酒銘」と題された、真澄自筆の書が現在も残っています。また「御代ノ松」の焼印が押された酒樽の実物が、県南部で収集され、現存しています。真澄が名付けた酒が実際に世に出回っていたことを物語る貴重な資料と言えます。

上記のように、展示では、江戸時代後期、人々がどのように酒と関わっていたのかを真澄の視点を通して紹介しました。そこからは、現代の我々の生活とあまり変わらない、酒と人を取り巻く、様々な「物語」が見えてきました。

(菅江真澄資料センター 角崎 大)



「穂酒の図」  
『男鹿の寒風』館蔵写本



「御代ノ松」酒樽  
横手市・個人蔵

## 学芸ノート

### アリ採集

昆虫採集と聞けば、捕虫網片手に蝶やトンボを追いかけるイメージを持たれるかもしれませんが、私が昆虫採集でターゲットにしている虫は主にアリです。道行く人にターゲットの姿は確認できないようで、野外で採集していると「何をしていますか?」とか、「そこに何かいるんですか?」などとよく尋ねられます。奇妙な道具を口にくわえながら、じっとしゃがんで地面ばかり見つめる姿はきっと異様に映るのでしょう。

昆虫採集をしたことがある人も、アリの採集経験は少ないのではないかともしかしたら、これからアリのターゲットに採集してみたいと思った稀有な昆虫愛好家が秋田にもいるのではないかと、今回はアリの採集方法の一端をご紹介します。

#### 採集方法その1 「アリを見つけたら吸う」

基本的にアリは口で吸い上げて捕獲します。エッ!?と思われるかもしれませんが、アリのような小さな昆虫を捕まえるための道具に、吸虫管があります(図1)。円筒形の容器に差し込まれた2本のチューブの短い方をアリに近づけ、口にくわえた長い方のチューブで勢いよく吸い込み、吸引力でアリの容器内に閉じ込める道具です。口で吸い上げる方のチューブには細かいメッシュが取り付けられているため、勢いよく吸い込んでも口の中にアリが入ることはありませんが、つちぼこり土埃や稀にアリの出したのど胃酸を吸い込み喉を傷めることがあるので使用には注意が必要です。吸虫管を使うとアリの傷つけることなく採集することができます。吸虫管は市販されていますが、自作することもできます。



(図1) 吸虫管

#### 採集方法その2 「見えないなら篩う」

厚い落葉層には多くのアリが潜んでいます。出てくるまで待っていても効率が悪いので、地面に白いシートを敷きその上で落ち葉ごと土を篩ふるいにかけます。白いシートに落下したアリはピンセットや吸虫管ですばやく捕まえます。

#### 採集方法その3 「出るまで待とうツルグレン」

めったに地上に現れない種類や体長が2mmかそれ以下の微小種は見つけることすら困難です。そんな時はアリの方から出てきてもらいます。まず土を採取して持ち帰り、5mmメッシュの篩ふるいに盛り入れたら、白熱球で上方から土に熱を加え続けます。乾燥と熱さに耐えきれず下へ下へと逃げだしたアリはメッシュを通過して、その下に置かれたエタノール溶液入りのピーカーに落下する仕掛けです(図2)。少々可哀相なこの方法はツルグレン法といいます。顕微鏡で土の混じったピーカーの底を覗くと、深い海の底にいるような不思議な感覚を覚えます。そこには、アリ、トビムシ、ゾウムシ、ムカデ、ヒメミミズ等々、土壌動物たちの神秘的な世界が広がっています。博物館教室「アリの観察会」ではツルグレン法で採集したアリもご紹介したいと思います。

(生物部門 藤中 由美)



(図2) 自作のツルグレン装置

## 「工事許可申請」のために作成された城下絵図

当館所蔵の守屋家資料の中にある、文政13年(1830)の「出羽秋田城下絵図」を紹介します。この絵図は東側を上にした向きで描かれ、左上の部分に藩主佐竹氏の居城である久保田城を配置し、南北に長く城下町を描いています。南北に流れる旭川をはさみ、城下町の東側は「侍屋敷」すなわち武家地、西側の大半が「町家」すなわち町人地であることが分かり、身分ごとに居住地が区分されるという城下町の典型的な特色を読み取ることができます。

資料左下の記載に目を転じると、「本丸より南外曲輪西方土居幅四間 右絵図朱引之通り新橋掛置き、土居切明け申したく、願ひ奉り候、以上」という文言が記されています。旭川に新しく橋を掛けるため、外曲輪と呼ばれる武家地外周の土塁(土居)を切り抜きたい、という内容の文章です。なお、この土塁の高さは8尺(約2.4m)あったことが資料右上に記されています。差出人の「佐竹右京大夫」は第10代秋田藩主の佐竹義厚よしのりであり、藩主から幕府へ提出された許可申請の写しであると考えられます。

幕府が大名統制の目的で定めた武家諸法度によると、諸大名が城郭の修理を行う際には必ず幕府へ届け出るようになっていました。この資料を読みますと、三ノ丸より外側の武家地を、城下町であると同時に城郭の一部として藩が認識して

いたことがよく分かります。そのため、武家地外周の土塁を切り抜く際にも幕府への届出を怠りなく行ったのでしょう。付け加えれば、橋自体も軍事的に重要な役割を果たしていたので、その新設には幕府の許可を要したのでしょう。ちなみに、同じ旭川に掛けられていた四丁目橋と五丁目橋は少なくとも江戸時代前期においては「はね橋(跳開橋)」であったようで(「梅津政景日記」寛永9年6月25日条)、この点も城下の橋が軍事的機能を備えていたことを物語っています。

文政13年に藩が申請を行った新橋は三丁目橋ですが、『秋田市史』第3巻近世通史編によると、160年前にあたる寛文10年(1670)頃には三丁目橋の存在が確認できます。ところがその後、時期は不明ですが洪水などの理由で流失したものと考えられます。従って、「新橋」と呼んではいないものの、三丁目橋は過去に存在していた橋なのです。文政13年の届出の後に掛けられた三丁目橋は、嘉永2年(1849)の「久保田城下絵図」(秋田市立佐竹史料館蔵)には描かれており存在が確認できるものの、嘉永7年(1854)の洪水で再び流失しています(「伊頭園茶話」十の巻)。久保田城では相次ぐ水害のため、何度も土塁が崩れたり、城下の橋が流失したりしています。城郭の維持管理に努めるため、秋田藩は大きな負担を強いられたことでしょう。

(歴史部門 黒川 陽介)



出羽秋田城下絵図(文政13年)



土塁を切り抜き、新橋(三丁目橋)を掛ける位置を示した部分

## 出張展示

ひきふだ

### 「明治の広告デザイン くせになる引札の魅力」

数年来、県立図書館の特別展示室で春に展示会を開催してきました。本年は令和2年4月4日(土)から5月26日(火)まで開催の予定でしたが、感染症の流行をうけて予定の半分ほどの日数の開催となり、約2千人の方々にご覧いただきました。

引札は、江戸時代以降、商店・商品の宣伝のため配布されたチラシです。明治時代には絵を主体にしたカラフルな引札が流行し、得意先への正月の贈呈品として使われました。これを正月用引札と呼びます。現在でいえば、企業名や店名が入った名入れカレンダーに近いものです。

商人が贈りあう品ですから、めでたく景気の良い図像が好まれました。バラエティに富み、少々しつこい色づかいで、美しくも俗っぽい引札図像には、くせになりそうな魅力があります。

展示では64点の引き札を展示し、その用途、様式の変遷、画題の特徴、地方印刷所の製品などについて紹介しました。

(歴史部門 新堀 道生)



土崎・本吉商店引札 明治31年 引札は顧客の目を引く必要から、奇抜な図像のものがよくあります。巨大なキューピットが港の入口に立っています。どうしたわけか時計を持っています。エーゲ海のロドス島で港の入口をまたいで建てられたと伝える巨大な神像がアイデアの元になっています。



土崎・松葉良之助引札 明治33年用 掛け軸の中の大黒天から金銭が降りそそぐ夢のような光景。



土崎・長沢商店引札 大黒天の袋から財宝を抱えた子どもが飛び出てきます。



土崎・長沢商店引札 明治35年用 書き初めをする子ども。よく見ると、「あきない」「はん糸い」と商魂たくましい言葉を書いています。

# 博物館の風景

## 博物館教室



「名誉館長館話（7月10日）」



「史料で学ぶ秋田の歴史（7月19日）」



「未来の学芸員養成講座 自然編 歴史編 フィールドワーク（8月1日～2日）」

## 展示



ふるさとまつり広場展示  
「鹿島船（5月22日～6月23日）」



（男鹿市立潟西中学校 6月11日）

## 博物館出前授業

## 教員のための博物館の日 （8月4日）



開講式



貸出可能資料の紹介